



〈一冊の本〉

生井久美子 著

「ゆびさきの宇宙 福島智・盲ろうを生きて」

岩波書店2009年

1,890円（税込）

本研究所嘱託研究員 古賀皓生（教育学）



私が在職していた今から10年ほど前に、本研究所の主催で、全く見えず、聞こえない盲ろうの東大教授の福島智さんを招いて講演会が行われた。私は本務の教職課程の行事と重なって聴けなかった。終了後、研究棟で会った

O教授に「講演会に行ってきたよ。感動した。実にすばらしい内容だった。あなたは どうして来なかったの」と言われたことを思い出す。握手だけでもしに行けばよかったなあと今は思う。というのも、大学院博士課程在学中の福島さんと本学近くの居酒屋「五條」で出会い、その快活でユーモラスな人柄に接していたからである。本学卒業生で、車イスで自立生活をしながら、当時大学院生だった宮部修一君（現在本学及び熊大の非常勤講師）に誘われてのことだった。

あの時、指点字とそれを使っての通訳の速さに驚き、あれはどのようにして生み出されたか知りたいと思っていた。

さて、本書は、朝日新聞の記者である著者が、取材の中で、福島さんに魅せられ、この存在をありのままに伝えたいと関連資料を読み込み、福島さんに密着取材を続け、関係の深い人々にインタビューし、踏み込んだ対話によって、ありのままの福島さんの姿をとら

えた上で、自然な語り口で再現し、彼の全体像を描き出した見事な記録である。

まず、盲ろうとは、どういう存在かを整理し、3歳で右眼を失明し、9歳で左眼を失い、18歳で全盲ろうになる経過と周囲の人々の様子が描かれている。絶望的な状況での苦悩と思索と行動は心を打つ。その危機から救い出したのが母親の考案した指点字と全盲の女性との交流の中で生み出された通訳の実践であった。こうしてコミュニケーション手段を得たことによって、可能性が広がり、周囲の人々に支えられながら、悪戦苦闘して大学へ進学した様子が描かれている。

私は以前から、東大先端科学技術研究センターは、なぜ福島さんを必要としたのか、彼はそこで何を研究するのだろうかと思っていた。本書の後半に、そのことについても書かれていた。彼の研究内容は、バリアフリーについて多角的にとらえ直すことと、能力主義について根本的に追求し続けることであった。

この本で、思いがけなかったことの一つは、彼が適応障害になっていたことであった。本書には、その原因や背景、そしてその対応策も詳細に書かれていた。その中で、「福島智を生きるということ」がどういうことなのかということ、少しは理解できたような気がした。

深く感動することの多かったこの本で、最も心をひかれたのが、最後の「子どもたちへ」のメッセージだった。小学校での講演内容や東大に会いにきた子どもたちに語りかけた内容をまとめたものであるが、自分たちで考え続けるヒントとなるようにわかりやすく整理された助言が暖かい。子どもたちへ直接届けたい気がした。

本書の最後には、参考文献リストと関連年表も収められており、福島智さんと盲ろう者協会の活動を知る貴重な資料になると思う。